学習パンフ No.2

地域からの教育づくり

―親とは何か、学校とは何か―

野本三吉

地域からの教育づくり
野本三吉

矢田同和教育推進協議会 発行

まえがき

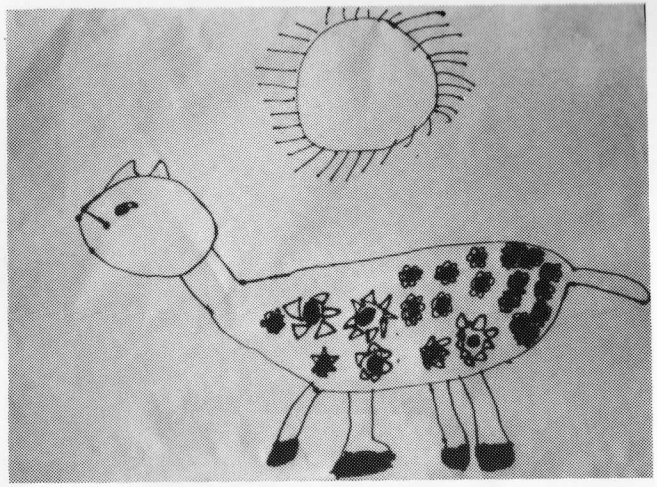
ぼくにとって、第二回矢田まつり（部落解放矢田文化祭）に参加させてもらったことは忘れられぬ出来ごととして残ると思います。

解放会館の舞台で、矢田の祭り太鼓を力づよくたたきつづけた老人会の方々の陽にやけた腕と、まっ白なはちまき。そして、会場いっぱいにくり拡げられた展示の作品群。

特に「矢田部落の歴史と生活展―語りつごう矢田部落の生活と文化の歴史を」は圧観でした。

ぼくは、やはり子どもたちの教育は、地域の人々の中でつくり出されると思っています。中でも、おとなたちの労働している姿に接し、一緒になって労働するという体験によって子どもの教育は成立すると思っています。

けれど現実の学校教育は、子どもたちを現実生活から引き離し、親やおとなの生活の臭いから遠ざけているのです。



そのために、子どもたちは、生活に根をはり、友人たちや先輩たちから生きるための栄養源を吸収することなく、生きてゆく見通しも希望もなく、いたずらに焦せり、悩んでいるのです。

こうした中で、矢田の子どもをとりまくおとなたちの取りくみは、以前から、とても心惹かれていました。

「解放塾」の試みや、「教育の町」・「解放の町」・「住民自治の町」を目指し「部落解放総合計画」にむかって活動している矢田の実践は、一度触れてみたいと思っていたのでした。一時期の高揚を過ぎたとはいえ、思った通りの情熱と実践を、ぼくは矢田のみなさんの行動と生き方の中に見つけました。

それは、子どもの教育をつくりだすためには、住民ひとりひとりの要求を反映した、住民によって実現する「町づくり」の運動が不可欠だということです。

矢田全域のあらゆる問題をとりあげ、解決してゆくために町づくりの展望をつくりあげてゆくことによってはじめて、子どもの教育に腰が入るということです。

そのためには「親」から「子」へ、「子」から「孫」へと、部落解放、差別をなくす生き

方の息吹きが伝えられてゆかねばなりません。時代が大きく戦争へ、ファッシズムへと回転しはじめている現代だからこそ、矢田の実践が、各地で再生し、根ずく必要があると思っています。

ぼく自身、矢田解放会館で感じとった解放へのエネルギーを、自分の地域を再生させるばねにしたいと思っています。

そうして、こうした実践が各地で押し拡げられることによって、新たな共同体の秩序、民衆の価値観が形成され、人間解放の文化がうまれてくるのだと思います。

これからも、矢田の突出した実践に学びつつ、部落解放の思想を地域に根づかせるため努力したいと思っています。

一九八三年二月

野本　三吉

この会場に入りまして、とっても立派な会館なのでびっくりしたんですけど、この会館がおそらく建てられるまでに、たくさんの方たちの努力があったんだということが同時に感じられまして、本当に大変だったろうなあということが伝わってきます。

僕自身が今考えていることや、今までやってきたことは、おそらくそれに比べると、とるにたらないような形のものじゃないかなあというふうに思いますけど、今日はせっかくお呼びいただいたので、精一杯お話をさせてもらおうと思います。

ミナト横浜寿の町

横浜に寿町という町があるのですが、みなさんご存知でしょうか。横浜というと大体港町がイメージに浮かぶと思うんですが、船がたくさん入るところですけれど、実際には貿易港ですからそこでたくさんの荷物が積荷されまして、それを倉庫に運んだり、陸送したりするときにたくさんの人たちの手が必要になるわけですね。実際に見た方がおられるかどうかわかりませんが、大きな船から、小さなはしけと呼ばれる船にまず移されるわけですね。そして、そのはしけが運河をずっとのぼっていって、倉庫に上げるわけですけど、

肩にかつぐと一〇〇キロ、二〇〇キロという重たい穀物だとか、石炭だとか、大豆だとか小豆だとかそういうものを運び上げる「うわかた」という労働者だとか、実際に荷物の運搬をするたくさんの労働者が必要になるわけです。この人たちが生活する町が寿町という町です。実際寿町という町の名前は、おめでたい名前なんですが、この辺一帯が寿町とか蓬来町、長者町、とか羽衣町とか、とてもきれいな名前がつけられていますが、実際にはこの町がつくられるのには大変な犠牲があったわけですね。それで、きれいな名前がつけられているんですが、この一帯はもともとは海で、それが埋めたてられて、貿易港にするために町がつくられたわけですけど、それが非常に難事業だったために、人柱をたてなければならないということで、何人もの人が犠牲になったというふうなことがあるわけですね。ここにある寿町というのは、通称ドヤというふうに言われています。ドヤというのは逆にしていただくとわかるんですが、逆にするとヤドということですね。ヤドヤというのは普通、人が宿って、そこに生活をすることができるわけです。陰語といって、逆に言葉を使ったわけですけど、人がとても住めないところという意味です。

二畳間、三畳間、一間で、小さな明かりとりの窓があって、そしてふとんがずーっと敷

「矢田のまつり」で展示をみる野本三吉さん。
(左側：1982年11月28日 矢田解放会館で)

きっぱなしになっています。このふとんも実際には一年に一ぺんか二へんしか変られない。一晩泊るのに、大体今だと八〇〇円～九〇〇円という値段です。だから考えてみると、一泊八〇〇円～九〇〇円のお金を払えば泊れるわけですから、安いような気がするんですが、一月に直しますと、安いアパートが充分借りれる値段になるわけですね。もしお金がなければその日泊まることができないわけです。ですから、逆に言うと、その日、その日、自分の寝ぐらを探すのが、大変なことになってしまうわけですね。そして、やっと泊まることが出来る。その旅館も前の日にはだれが泊ったかわからない、足をつっこむと、じっとりと汗ばんだ、しめったふとんの中に入るということになり

ます。

寄せ場の仕事

仕事の形態そのものは、一日一日仕事を探して働くわけです。一日の仕事が大体いま七〇〇〇円～八〇〇〇円くらいの値段です。毎日仕事につくということは大変です。朝の五時ぐらいから、もう仕事を探しに出ます。普通には日雇労働者というと、なまけている人のように印象を持ちますが、実際には朝五時、六時には出て仕事を探さねばなりません。ですから、朝早くから食事をし、地下足袋をはいて、軍手を持って、仕事に出なければいけません。夜も遅くまで仕事に追われます。ですから、毎日仕事をするということは、まず不可能です。

日雇いをしている方たちは、大体四〇歳をすぎますと、歯がボロボロになってしまいます。一〇〇キロ、二〇〇キロの荷物をかついだり、コンクリート練りの仕事をしたりということでやっていると、どうしても力を使いますから、奥歯をかみしめるわけですね。そうすると歯をいためます。ですから、もう五〇歳をすぎられますと、歯がほとんど一本か

二本しか残らないという方がとても多いんです。そういうことで非常に苛酷（かこく）な仕事ですね。ですから、三〇日まるまる働くなどということは、とてもできない。十四～五日一生懸命働くと、もうクタクタになるというふうな状態ですね。そういうところで仕事をしているわけです。ここに集ってくる方たちは、全国からさまざまの理由で、地元で生活ができなかったということ、あるいは集団就職で都会に出てきたんだけど、そこで仕事がダメになってしまって、簡単にできるだろうということで、こういう寄（よ）せ場というふうに言いますが、そこに集まるわけですね。山谷・釜ケ崎・寿町というのは、そういう形になってきているわけです。

仕事があるときにはとてもいいわけです。とくに非常に経済が発展したといわれた六〇年前後というのは、全国で非常に日雇いの仕事が増えたんですが、その後構造的な不況になって仕事はぐんぐんと減ってしまって、そうなると何の身分保障もありませんから、仕事がなければ、失業保険とかそういうものが出せませんので、会社の方は仕事無いよと言えば、それでおしまいになってしまうわけですね。従って何の保障もない、お金がないと食堂は実際に開いていても、お金がないので食べることができない。あるいは、泊るところがわずか八〇〇円、九〇〇円というお金で、お金がたくさんあったときには何でもなかったことですが、それが払えなければ、部屋が空いているにしても泊めてくれない。そういう状況になってしまうわけですね。

不況と寿生活館の閉鎖

これが一九七五年頃から非常にひどい不況になってしまったわけです。毎日、仕事に出られませんので、この寿町の人口は大体その当時六千人だったんですが、日雇いの仕事が全くありませんので、食事がとれない、寝るところがないという労働者が、どんどん増えまして、そして千人～二千人という労働者が完全失業になってしまったんですね。これに対して行政の方では、一応泊る券、食事券というのを発行したりしましたけれども、とても追いつかなくて、しかもそれが長期にわたるということで、打ち切ってしまうというふうなことがありまして今日はその経過はお話ししませんけれども、僕らが勤めている寿生活館という建物を閉鎖したわけなんです。とてもこれ以上できない。しかもこれは全国的な問題で国がやるべきことで、一地方自治体がそれをやりきるということは財政的にも困

難であるということで、打ち切ったわけですね。しかし、労働者にとっては生きていくことができるかという瀬戸際の問題ですから、閉鎖された生活館の中に、自分たちでたくさんのふとんを借りてきて、泊り込み、そして食事を自分たちで作る、カンパを集めて作るということです。職員である僕らは、そこから他のところに配置転換をせよといわれたんですが、職員全員一致して、この町の中が僕らは職場だから、苦しくなったからといってここを逃げることは出来ないじゃないかということで、全員生活館に残りました。そして入ってはいけない閉鎖された生活館の二階に机を置いて、相談を続けるということで、これが六年間続いたんです。で、去年、生活館は再開されました。地元との長い間の話し合い、百回以上にわたる話し合いが、行政との間で行なわれて、解決をしまして、とてもきれいに内装されて、生活館もオープンされたんです。

地元での自主管理という方向で、地元の四人の人が職員として採用されるという形で、一応結着をみています。

経過はそういうことなんですが、この不況でもって仕事が全然なくなったときですね、どうやってそれを乗り切っていくかということで、いろいろあったんですが、僕らも職場

をある意味で追われたわけなので、何をこれからやっていくのか、わからなくなったんですね。相談場所も無くなってしまったし、町の中でただ相談をするといっても、僕らがどこにいるのかわからない。そこに机を置くにしても、町の人たちと一緒に何か話し合いをするような場所を作りたいなあと思ったんです。

寿夜間学校の始まり

町の人たちも、労働者もこの頃労働組合を結成していくわけですけども、その時分に、近くの場所を借りまして「自由に寿の町と自分を語る会」という名前で集まりを始めたんです。ところが、その集まりをすると、たくさんの人が入ってきまして、もう言いたいことがみんな、もうたくさんあったわけですね。そのとき、だれか聞いてくれる人があったら、いっぱいぶっつけたんだけど、なかなか無かったもんですから、そこへみんな集まってきて、ねじりハチマキで、地下足袋姿で、無けなしの金をはたいて飲んだワンカップのにおいをプンプンさして「何だってんだよ、仕事が無くなって俺たちいいときばかり使って」という話が、みんなからもうワイワイ、ワイワイ出てくる。もうちょっと話を順番に

しようよというふうなことがなくて、俺のことを聞いてくれということで、みんながワイワイ、ワイワイ。だれか制止すると、机をひっくり返して「俺のこと聞いてくれないんなら、俺帰る」ということで、最初のころというのは、メチャクチャな会になったんですね。しかし、まあこれ続けてどんどんやっていこうということで、どこにも自分のうっぷんを晴らすところもなかったし、とにかく自分たちで話し合いの場を作ってやっていこうというふうになったんです。これが何回か続けていきますと、不思議なことにひとつのルールみたいなものができてくるんですね。とにかく、言いたい人がいたら、全部話さしてみようじゃないかというのが自然に出てくるんです。

これは、不思議なんですけど、だれかがしゃべり出しますね。俺はこうだ、ああだ、というふうにしゃべり出しますと、

ちょっとだまれ、俺がしゃべろうと思ってたんだ、と言いますと、夢中でこういきますので話がなかなか終らないんです。ところが、たくさん集まっている労働者が「よし、聞こう。おまえしゃべりたいんなら聞こうじゃねえか」ということで、みんな腕組みして、じーっとその目を見ながら聞きますと、シーンとしているところで自分のことをしゃべろうとすると、五分もつのがやっとになっちゃうんですね。順序だててしゃべろうとすると、だれかチャチ入れてくれると「ふざけんじゃねえよ」ということで、話が先に進むんですが、シーンとみんなが聞いてくれると、どこから順序だてていいかわからなくなって「私は何のだれべえと申します。生まれはどこです。おわり」ってなことになっちゃうんですね。五分間がなかなかもたなくなってきて、話すということになると、相当自分でも準備してこなくちゃならない。何が本当に自分が言いたいのかということがわからないと、みんなの前でちょっとしゃべれないんじゃないか、というふうなことになってきました。

そうすると、ただしゃべりっぱなしということじゃなくて、今、仕事がないということは一体どういうことなのか、もっとわかるようにだれかしゃべってくれないか。そういう人間はいないのか、ということになりましてね。それで、全くの自前でやってますから、

中でだれか一番知ってる人が先生になってもらわないと困るわけです。どこからか偉い先生が来て、しゃべってくれるんであればいいんですけど、そういう感じではなしに、その当時の状況ではとてもそんなことは望むべきもなかったものですから「俺は昔、司法試験を受けたことがあるぜ」という六〇すぎのおじいさんですね。が、古ぼけた六法全書を抱えてきて「じゃ、俺は労働法の講義をしてやる」ということで始まるわけですね。昔うろ覚えの労働法ですから、たちまち質問が集中して、「ちょっと待てよ」「ちょっと待てよ」と、一生懸命めくって「よくわかんないから黒板に書け」ということで、黒板に書いて、そこはどうだ、ああだというふうな話になって、当初は自由な話し合いですね。

はなすというのは言べんに舌という字を書きますけど、もうひとつはなすというのは、自分の思ってるのを放すというのがありましてね。僕はそのなかで一緒になって聞いていて、話し合いというのは、自分のもってるものをとにかくどんどん、どんどん放すことなんだなあ。それがみんなのなかで放されて、何かこう見えないんですけども、そこでゴチャゴチャかき回されてると、何かができてくる。それが自分の方にハネ返ってくる。そういうことが話し合いということかもしれない、ということがとてもよくわかったんです。

そして、そのなかから勉強ですね。学習をしようというふうな話が出てきてしまう。これは、みんなはじめ予想もしないことでした。「とにかく言いたいことを思いっきりしゃべり合おうや」ということで、バンバン、バンバン話し合っていたところが〝勉強〟ということになってしまって、労働法ですね。憲法のことをちょっとやってみようだとかですね。俺一度も読んだことないけど、俺たちのこと守るのひとことぐらい書いてあるんじゃねえか、というふうな話になってきて読みますね。「いいことばっかり書いてあるじゃねえか。でも、その通り全然ここでいってないよ」ということですね。「最低の文化的生活を保障するって、どういうことだ、こりゃあ」というふうなことですね。それも、憲法というのは、国民に守らせようとする、国民ひとりひとりが守るべきことではなくて、実はこの〝憲法〟というのは、行政の人間が守るべきことが、ここに書いてあるんで、その守ってもらわなくちゃ困る、一番先に読んで勉強してもらわなくちゃならないのは、行政の人間ではないかということが、そこでわかったりしましてね、ハッとしたりするんです。

そこで〝自由に自分と寿を語る会〟というのを何か名前をつけようじゃないか、ということになりましてね、そこに集まった人たちのほとんどは学校にいい想い出をもっていま

せん。あるおじさんは「俺は学校での、半分は廊下で立ってた」とかですね、「学校には三日ぐらいしか行ってない」とかですね、とにかく学校でもう怒られて、叱られたり、勉強ができなくて、嫌な想いでみんなからいじめられたとかですね。あんまりいい想い出はないんです。

ところが、みんなは〝学校〟という名前をつけようというんです。ほんものの勉強をここでできるんじゃないか。今ちょっとやってることは、何だか知らないけど、俺たちが必要としていることを、とにかくわかってくるような気がする。本当の〝学校〟でいいんじゃねえか。ということになったんです。その時々の先生というのは、一番そのなかで知ってる人が立ち上ってしゃべってくれる、黒板に書いてくれるということで始まったわけですけど、はじめは思いきって寿自由大学がいいとか、大学ちゅうのは、ちょっと程度が低いんじゃないかとか、いろんな想いがあるもんですから、小学校にしようとか、小学校じゃちょっと恥かしいとか、いろんな話が出まして、夜みんな集まるもんですから、『夜間学校』という名前にしようということで『寿夜間学校』という名前になるんです。

文字に書く

その当時、まずみんなバーッとしゃべりまくっていったあと、しゃべったものはどんどん消えていっちゃうもんですから、何かこう、あんまり書いたことはないけど、字でもって書いてみようというふうなことで、出てくるとこれが不思議と俳句とか短歌なんです。

あるいは、せいぜい詩ですね。そういうものが次々に出てきたんです。それで、とってももったいないもんですから、寿文学というガリ版刷りの雑誌をどんどん出しまして、そこに集まってきた作品をどんどん載せたんです。

そうすると、とってもいいものが次々と出てくるんです。いくつかだけ、ちょっと紹介をします。たとえば俳句というのに、

軍手はめれば　働く力が　たちあがる

この詩を持って来てくれた桜井さんはもう亡くなりました。しかし、この詩をもって来